

正親含英先生を偲ぶ



略 歴

- | | |
|--------|---------------------------|
| 明治二十八年 | 十一月十六日、兵庫県姫路市勝原区山戸西宝寺に生まる |
| 大正 八年 | 六月、真宗大谷大学専修科卒業 |
| 大正十五年 | 四月より昭和六年四月まで大谷大学予科教授 |
| 昭和 二年 | 四月より昭和六年四月まで専門部教授兼任 |
| 昭和 十年 | 布教研究所常任参与 |
| 昭和十二年 | 十月より翌年八月まで大谷大学学生監 |
| 昭和十三年 | 五月、大谷大学学部ならびに専門部教授嘱託 |
| 昭和十七年 | 四月より昭和三十二年三月まで大谷大学学部教授 |
| 昭和二十三年 | 七月、安居次講として『唯信鈔』を講ず |
| 昭和三十年 | 十二月、真宗大谷派講師 |
| 昭和三十二年 | 四月、大谷大学常勤講師 |
| 昭和三十三年 | 七月、安居本講として『浄土三経往生文類』を講ず |
| 昭和三十六年 | 十二月より昭和三十六年八月まで大谷大学長 |
| 昭和四十年 | 九月、大谷大学名誉教授 |
| 昭和四十四年 | 七月、安居本講として『仏説観無量寿経』を講ず |
| | 十二月二十八日、自宅にて逝去 |

正親兄の思い出

本学名誉教授 名 畑 應 順

正親兄が突如亡くなってから、早くも三回忌に近ずこうとしている。先頃、大谷学会委員の方から、諸般の事情により遅延したが、このたび、学報に正親先生の追悼の意を表したいから、私に追悼文を書くように、と申しつけられた。私は何だか今更らしい心地がしてならなかった。またそうして私を悲しがらせるのか、といささか恨めしくも感ぜられた。恐らく故人は渋い顔をして、余計なことをしてくれるな、君も要らぬことをするではない、とたしなめられるような気がしてならない。

会って話をしているときには、親しく懐かしかったが、書いた物を読んでいると、何となく恐しくなる兄であった。生きている間は、ほほえんで接してくれたが、亡くなってみると、厳しく見つめてくれる兄である。いつも何をぐずぐずしているのか、と叱られるような、ときにはわけのわからぬことをしている憐れな身だな、と苦笑されるような、このごろの私である。

曾我・金子両先生が、あのご高齢であるにもかかわらず、両先生をお見送りすることは、全く考えていないようであったが、名畑とはどちらが先かわからぬ、と常に兄がもらしていた、とは奥さんのことばである。

壮年時代には、一見して、虚弱らしいからだをしていたことも

あるが、平素、健康な方で、五十余年の交友の間、一度も兄を病床に見舞った記憶はない。そのくせ、幾度か重病を患ってきた私は、どれだけ、兄に心配をかけてきたかもしれない。その私が後に残って、兄を弔わねばならない、とはまことに思いもよらぬことであった。

○

私ども二人は十余日を隔てるだけで、同年の生まれであり、谷大では、入学卒業ともに同時の同級生であった。研究科時代に、当時、学生に徴集延期を認められていた兵役に、二人は一年志願兵として、おそまきに服役した。その休学の期間さえ同じであった。そして不思議にも、同じ師について、教えを受けることができたのである。

同僚として母校の教職にあった年月も、ほとんど相近い。長年月にわたって、教職にあったということは、その折り折りの内外の事情があったとはいえ、二人に共通して、不本意なものがあった。過ってその地位にあったとも、いえるようである。そのため機会あるごとに、幾度かともに退職を願ひ出たことである。ことに兄の場合、厳密に辞令を調べてみれば、進退について、身分の変動が多く、同じ役職に勤続するということは、少なかったように思う。

研究科では、兄は「業の研究」を課題とし、教員としては、終始、真宗学を受け持ってきた。しかし、学問とか教学とかいいう概念を吟味しないで、単純な見方をし、率直な言い方をすれば、兄は単に仏教学者、あるいは真宗学者と呼ぶには、適わしくないよ

うな気がする。むしろ仏道の行者であり、真宗の信者であったように思う。そこに常に兄としては、学園に居づらいいものを感じて、引退しようとし、学校の当事者や師友の間には、幾度か嫌がる兄を惜しんで、引き止めようとしたように思う。私はいつもその意を承けて、兄の下宿に、または自坊に、どれだけ翻意を求め、説得に力めたかもしれない。

いつも京都市内の下宿や旅館に間借りしており、ついに独立の家屋には兄は住まなかつた。後年には多く自坊から通勤していた。養子を迎え、さらに住職を譲るまでは、兄はあの由緒ある大坊の寺主としての任務を、完全に果たしてきた。仏祖の崇敬にも、門徒の教化にも、一野僧のような態度で、忠実に力を尽くしてきた。兄は何よりも人間であり、本当の僧侶であつた。教職は二の次であつた。

私たちが中年の頃、まだ谷大の学生は宗門の子弟が大部分を占めており、それがとかく宗門外に出て働こうとする傾向の見えそめた時代に、兄は卒業生送別会の祝辞に、ひたすら諸君が田舎へ帰って、絵像木像の仏様の前で、キンを打つてくれることを希望、と、いい切ってくれたことが、今に忘れられない。

○ 兄は安居の本講を二度勤めている。昭和三十三年度に『三経往生文類』を、同四十年度に『観無量寿経』を講じた。後者の場合は、その年のほかの当番講者が内命を受けていて、半年も過ぎてから、発病して、辞退されたので、やむなく中途で替って、本講を引き受けて、苦勞せねばならぬことになった。前者の場合も、

事情は忘れたが、当番になるには、大分、無理をさせられたように記憶する。

三十三年度の講本『三経往生文類』の三往生については、兄の深い領解がある。臨終を期するような雙樹林下往生や、如来の誓願を疑う自力念佛者の難思議往生に対して、難思議往生は本願不可思議の往生であり、格別の義を容れるべきでないとの説を、前からありがたく聞かされていた。ところが講義の席で、極めて平易に、大経往生の難思議往生というのは「どうということもない往生だ」と述べたそうである。一人の老所化がこれを咎めて、その出身地方で、少し問題を引き起こしかけたらしい。幸いにその後、立ち消えになったようであるが、兄が領解のままを語る時には、極めて直感的な素朴なことばで表現するので、心ない者には、往々誤解されることもあつた。

兄が曾て話してくれたし、何かに書いていくれるようにも思う。ある門徒の人の葬式に行つて、お斎の席に坐つたときの話である。来客の一人から、人は死んで、どうなるだろう、という疑問を提起したものがあつた。ほかの客たちから、そこはかとなる、意見や感想が述べられた。もとより簡単に解決される話題ではない。そこで最後に黙って聞いていた兄に、「ご院主さん、いかがですか」と尋ねるものがあつた。兄はいとも無造作に「死ねば灰になるのでしょうね」といい放つた。一座はどつと笑つた。異口同音に「そうでしょうね、灰になることは間違いないでしょうね」といった。兄はその笑い声を聞いて、涙がこぼれた、というのである。みな死んでどうなる、こうなる、と知的な一般論

をあげつらつていて、この自分が灰になるといふ、敢しい事実を忘れてゐる。それを歎いた兄の心境が思われる。

○ 宗祖の生涯について、いろいろな奇瑞不思議をもつて彩られてゐる『伝絵』であるが、重要な往生の一段においては、いかにも史実さながらを思わせる、淡々たる記述である。

聖人、弘長二歳戊午仲冬下旬の候より、いさゝか不例の気まします。それより以来、口に世事をまじへず、たゞ仏恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらはさず。もはら称名たゆることなし。しかうして同第八日^{時午}、頭北面西右脇に臥し給ひて、つゝに念仏のいきたえましましをほりぬ。

これは親しく聖人の終焉にあつた、遺族や門弟の人びとが、まだ多く生存していられる時代の描写として、いかにもよく真相を伝えてゐると見られる。また伝記によつて、宗義を顕彰しようとする覚師の意図も、完全に達成されてゐるようである。覚信尼が父聖人の臨終を報ぜられた書状そのものは、いまは亡失して見ることが得ないが、これに対する恵信尼の返書に「されば御臨終はいかにもわたらせ給へ、疑ひ思ひまいらせぬ」といわれるのに照らしても、聖人の臨終には何の奇異もない、凡夫さながらの往生を身を以て示されたものである。

世の高僧碩徳の奇瑞不思議にかざられた臨終ならば、凡俗のわれわれは、とても追隨することはできないが、聖人の示されたような、凡夫さながらの往生であつてこそ、われわれも共感し、追慕することができよう。

正親兄は平凡に示された『伝絵』の聖人往生のこの一段に、聖人の念仏の生涯の帰結を読みとつて、いたく讃仰してゐる。ことに「念仏の息」といふことには、強く心をひかれ、生きておるのは、呼吸してゐることであり、その呼吸が念仏の息であるとして力説してゐる。

しかし、兄は静かに宿業の一生を省みて、死の縁無量なるを思ひ、聖人のように、声に余言をあらわさず、もつぱら称名たゆることなく、念仏の息たえるという臨終が、わが身に期せられるわけではなく、すべては宿業のままに終らねばならない。いかに苦悩し、狂乱して、一声の念仏も称えられずに終るかもしれない。しかし、そのまま大きな念仏の息のうちに終らせていただくのである。近くは自分の知友や同行が、自分の最後を聞いて、枕邊をとり囲み、みなが念仏してくれるであらう。自分はそのハタの念仏に包まれ、見送られて往くと思えば、それだけでも、大きな幸せである。

○ これは兄の遺著の中にも加えられた随想であり、曾て法席でも聞かされて、私の深く感銘を受けた話の一つである。

私はこの夏、病臥して、約束していた知友の寺の講席へも出られず、小庵にこもつて、何の仕事もできなかった。床中、ひとしお先立ってくれた正親兄を憶ひ、その遺著をも披いた。深いご縁を思えば、断わるにも断われない、学報追悼号の原稿締切の期日が、たまたま目前に迫つてきて、辛いながらに筆を執つた。研究雑誌に載せていただくには、甚だ忸怩たるものがある。残年も乏

しい老病の身の繰り言として、お許しをこう次第である。

〔主要著書〕

業道自然	昭11・1	法蔵館
流水に描く	昭15・9	丁子屋書店
真宗要義	昭15・12	法蔵館
真宗の話	昭19・7	大谷出版協会
真宗読本	昭27・6	全人社
三経往生文類講讀	昭33・7	安居事務所
本願	昭35・8	大谷出版社
観無量寿経講案	昭40・7	安居事務所
浄土真宗	昭44・11	大谷出版社
その他		